

ひなうた  
鄙哥

民謡—伝えゆく詩達  
うたたち

(本條秀太郎の会)



「地方座敷唄」を演奏する本條秀太郎(傳燈樂告提供)

## 消えつつある唄懐かしく

民謡にふれる機会が少なくなつた。かつては日本全国に土地に根ざした唄があつた。日々の労働の中で踊りや酒席などで人々が歌

曲として残してきた。

「鄙哥」第一部は酒席ではやつた小唄を集めた「地方座敷唄」。パンフレットに「小さなうたたち」とあるように、笛や太鼓の陰囃子を入れるなど変化をつけながら一曲はごく短いもので構成している。日本海に面した良港として古くから栄えた北海道の港町の「江差追分」、山形のものやま節から「菊と桔梗」、千葉「安房節」、北国街道の宿場温泉として繁栄した「岩室甚句」、長崎「愛八ぶらぶら節」「長崎さわぎ」、佐賀「佐賀梅干」を秀太郎は唄と三味線でしつとりと聞かせた。

第二部の「地方唄」は地方豊かな曲に胡弓や囃子を入れ編曲・作曲すること

で全体に洗練された曲に仕立てている。神奈川で歌われていた、初めて生まれた子のための「初伊勢」でめでたさをことほいだあと、仕事唄として東京「思い節」「保谷糸より唄」、徳島「祖谷の粉ひき唄」、奈良「吉野木樵唄」、和歌山「湯浅醬油造り唄」と歌い継ぎ、新潟、福井、秋田、佐賀の盆踊り曲を「盆の送りに」として聴かせ、子守りが子どもの労働だったことから「小さな労働歌」を守唄で締めくくった。唄・三味線、本條秀太郎、秀五郎ほか。曲に新しさを感じさせながらもしみじみとした調べは懐かしい。

(梅左・芸能評論家)

4月21日、東京・紀尾井小ホール